スペシャル座談会

個別支援学級での複数年にわたる関わりから見えてきたもの

「横浜市芸術文化教育プラットフォーム・学校プログラム」では、アーティストが学校に出向き、子どもとともにさまざまなジャンルの創作活動に取り組んでいます。2004年のプログラム開始から18年の時が過ぎ、アーティストが同じ学校の同じ子どもたちと複数年にわたって授業を実施するケースも見られるようになりました。

今回は、同じアーティストが３年連続授業を行った緑園義務教育学校（泉区）の個別支援学級と、２年連続授業を行った北山田小学校（都筑区）の個別支援学級のプログラムに関わる方々にお集まりいただき、座談会形式で、個別支援学級の子どもたちと複数年にわたり授業を行うなかで感じたことや、アーティストが学校教育に携わることの意義について、それぞれの立場から思いを語っていただきました。

各学校の実施概要については授業記録ページをご覧ください

―緑園義務教育学校は統合前から数えて３年、北山田小学校は２年続けて、同じ個別支援学級のクラスを対象に授業を行っていただきました。複数年にわたり同じクラスの授業を受け持つなかで、感じたことを教えてください。

長井　山猫団はワークショップなどの活動を積極的に行っていますが、１つの学校に３年連続で関わるのは緑園義務教育学校が初めてです。初年度はどんな子どもたちがいるか分からないなか、いろいろな道具を揃えて授業に臨んだところ、ガムテープをひたすら引っ張り出したり、自分をぐるぐる巻きにしたり、子どもたちはとにかく自由に過ごしていました。とても面白い時間でしたが、先生方は「これではただの遊びじゃないのか？」と不安な気持ちもあったのではないかと思います。２年目以降は初年度の反省を活かし、「こんな題材・道具には子どもたちはどう反応するでしょうか」などと、授業内容をより詳細に先生方とご相談しながら進めていきました。先生方との信頼関係が築けることが、継続して関わることの良さだと強く感じています。授業後に１時間くらい学校に残ってお話しすることもありますよね。

雨宮　他の教科で外部の方に来ていただく際は、簡単な打ち合わせだけして、担任は後ろから授業を見学している形が多いので、このプラグラムのように外部講師の方と一緒に授業を作るというのは、私は初めての経験でした。３年目になると、アーティスト、教員、コーディネーター全員が、子どもの顔と名前が一致した状態で授業中の様子を振り返り、次の授業に向けた話し合いができる状態になっていました。個別支援学級は警戒心の強い子どもが多いので、同じアーティストに継続して来てもらうことで、安心して参加できる時間になっていたと思います。

緑川　２年目３年目になると、子どもたちのことを細かく伝えなくとも、「お願いします！」とお任せできるのがすごく気持ち良いですね。外部講師の方が授業をしてくれると、自分は普段と違うところから子どもの変化や行動を見ることができるので、ありがたいし、とても楽しいです。

長井　できる限り自由な授業をするなかで、先生方が良い距離感でサポートしてくださり、３年目はとても授業がやりやすかったです。継続して関わることで、子どものことを知れるというのも大きいですよね。大人が１対１で向き合った方が良い状況になった時に、阿吽の呼吸で誰かが自然とその子のサポートに入れたのは、時間を積み重ねたからこそできたことだと思います。１年間ないし単発で外部講師が授業にやって来るという体験も十分に素晴らしいものではありますが、同じアーティストが同じ学校で授業を続ける機会が増えたら、子どもたちにとってどれだけ良いだろうかと感じています。

ーみんなで一緒に子どもたちの変化を感じることができましたよね。年を重ねる度に成長していく子どもたちの姿を分かち合えたことが、コーディネーターとしてはとても印象的でした。北山田小学校は、今年度は全６回授業が行われましたが、前年度と比較して子どもたちの様子はいかがでしたか？

ぴんたろー　出迎えがすごかったよね、初日の。

歌子　駆け寄ってきて、「久しぶり！」とハグで出迎えてくれました。

大原　昨年度は、１日目に楽器体験のワークショップ、２日目にペットボトルを使った楽器づくり、３日目に発表会というスケジュールでした。今年度も授業の流れは同じですが、「横浜音祭り２０２２」と連携して授業日数を６日いただけたことで、楽器づくりと振り付けづくりに４日を費やすことができました。２年目という安心感のなかで６回の体験を共有し、子どもたちもチューニングできた様子でした。楽器づくりの最中に違う遊びを始める子どももいましたが、それを咎めることなく一緒に楽しむ余白の時間を作れたので、子どものなかで「ぴんたろーさんと歌子さんは、一緒に遊んでくれる人」という感覚になったのだと思います。振り付けを考える時も、「こうしてみたい！」、「じゃあそうしよう！」と子どもたちとアイデアを出し合って、仲間意識が芽生えているようでした。

ぴんたろー　楽器づくりの時間は、給食のお皿にデコレーションをして太鼓を作りました。子どもから「ぴんたろーが作ったのも見せて！」と言われたのですが、あまり良い出来ではなかったので「俺のは汚いからダメ」と応えると、子どもたちが「そんなことないよ！いいよこれ！綺麗じゃん！」と慰めてくれたんです。教えている、教わっているという感覚ではなく、すごく対等な関係になっていたと思います。

歌子　特別なことをしたわけではなく、本当に他愛のない言葉を交わして、距離が縮まっていきました。初年度はあまり興味を示さなかった子どもが、今年度は自分のできることを精一杯やって、授業に参加している姿が印象に残っています。それは私から見ると、ぴんたろーを好きになって、ぴんたろーが頑張っているから、自分もなんとか協力したいと奮闘しているように感じました。１年目と２年目では、関係性ができることによって、子どもの取り組み方が大きく変わったと思います。

北山田小学校の令和４年度授業最終日の様子。体育館に保護者を招き、アーティストの歌と演奏に合わせて、自分たちで作った太鼓を叩きながら、振り付けを披露した。

大原　最終日のコンサートでは、子どもたちの発表、アーティストによる演奏など全ての演目が終わった後、「もう１回やりたい？」と歌子さんが声をかけると、子どもたちが体育館のステージに駆け上がっていきました。そこまで想いを持って一緒に活動してくれたことに感動しましたし、人に合わせて何かをすることがあまり好きではない子どもたちが、振り付けを覚えて披露する姿に、どうしてここまでできるのだろうと不思議にさえ思いました。主任の先生も、「普段は体育館に入りたがらない子どもたちが、ここまでのことができたのが本当に良かった」と言ってくださって。コーディネートした側としては、学校でアーティストと子どもたちが出会う機会を作れたことは、価値があったのだと感じました。

ー積み重ねてきた取り組みが良い方向へ深まっているというのは、私たちも実感があります。

大原　雨宮先生がおっしゃっていたように、前提として安心できる場が作れたということがとても大きいですよね。一緒に活動することが楽しいと思えるかどうかは、「この人は大丈夫」という安心感に起因すると思います。

雨宮　人に対する安心感に加えて、山猫団の皆さんと、「完成を求められない、評価されない授業内容にしないと、みんなが安心して活動できないよね」とお話ししたことも印象に残っています。個人が作ったものをみんなに見せる形だと、評価される時間が生まれて子どもたちは抵抗を持ってしまうので、そうではない授業になるよう話し合い、今年度の「山を作る」授業ができました。山猫団さんが持ってきてくださったものを使って、どんな形でも良いから「山」を作るという授業で、子どもたちもものすごく集中して取り組んでいました。内容を吟味できたことで、子どもたちが安心して取り組める授業が作れたことも、とても良かったなと思います。

大原　評価しない声掛けも難しいですよね。「いいね！」「すごいじゃん！」という声掛けも、場合によっては大人からの評価に聞こえてしまうこともある。ですがぴんたろーさんの言葉は、友達同士の会話と同じように、対等なものとして子どもたちに届いているので、いつもすごいなと思っていました。

歌子　評価されない安心感というのはすごく大切ですよね。そしてそれとは裏腹に、認められる喜びも必要で、そのバランスがとても難しいと感じます。大人から「君に任せた」と言われることで誇らしくなる子もいるし、発表した後の達成感が喜びになる子もいるので、その時その時の子どもたちの空気感によって変わってくるんだろうなと思います。正解がない取り組みで、私たちが学ぶこと、教えられることの方が多いです。

雨宮　言葉ではない方法で「認められた」と感じられる瞬間もありましたよね。言葉がなくとも、子ども同士で作るのを手伝ったり、できたもので遊ぶことで、その作品を認めたことになるわけで。そういった言葉以外のコミュニケーションで認め合いを学べたのは、とても良い経験だったと思います。

長井　２年目にある先生が、「この時間は子どもたちにとって非日常だから、ゴールなんかなくていい。その時間を味わうだけでいいんだから、そんなに構えて準備をしなくていいですよ」と言ってくださったことがありました。学校によっては、子どもたちの不安を減らすために何をやるのか事前に詳細が欲しいと言われることも多いですが、その言葉で私はすごく授業をしやすくなりました。子どもがやりたいと言ったことをどんどん取り入れていきたいので、最終的にどこにたどり着くかは分からないけれど、だからこそ生まれることもあるのかなと思います。

緑川　山猫団さんと出会ったおかげで、変わったなと思う子どもがいます。彼の中で明確に何かが弾けたなという日があって、その前と後では動きが全然違うんです。自信を持って身体を動かせるようになったんだと思います。

長井　２年目の授業で、子どもたちが 40 分間即興で踊り続けた回がありました。飽きる前にいろいろとメニューを変えていく予定でしたが、「ピアノに合わせて自由に動いてみよう」という時間を作ったら、子どもたちが止まらなくなって。だから私たちも止めなかったんです。褒める、褒めないという次元を超えて、ただ音が鳴っていて、子どもたちは授業が終わるまで踊り続けたのですが、その空気を引っ張っていたのがその子でした。あの日彼は、「自分はこれが好きだ」というのを明確に発見したんだと思います。

緑園義務教育学校の授業の様子。山猫団の音楽家・北園優さんの演奏に合わせて、子どもたちが思い思いに身体を動かした。

歌子　私は子どもの頃、人の目を気にして誰にも言えないけれど、音楽が流れると自由に踊りたくなる気持ちをずっと抱えていました。だから、子どもの時にそういう授業を受けたかったです。本当に幸せな時間ですね。

長井　恐らく彼も、同じような気持ちを持っていたけれど、どこかに恥ずかしい気持ちがあったんだと思います。だけどあの日、恥ずかしいことじゃないんだと、彼の中で価値観が転換して、そしてそれがみんなにも伝播した。いろいろな偶然が重なって実現した奇跡のような時間だったと思います。

一信頼関係を築いて自由な授業ができるようになったからこそ、実現した時間だったのかもしれませんね。

長井　こういった授業を行うにあたって、先生方の理解は必要不可欠だと思います。先生方が「この時間は子どもたちにとって必要な時間だ」と思ってくださらないと成り立たない。外部からアーティストを招いて授業をするというのは、先生の負担もかなり大きいと思うのですが、それでも私たちを招いてくださる先生方の熱意も感じています。

大原　北山田小学校の先生とも話をしましたが、「この授業をすることによって子どもたちが変化する、成長する」という実感を持って、一緒に授業を進めてくださいました。このプログラムは普段の学校生活にはない特別な授業だと思いますが、今の教育現場でこういった授業を成立させるには、どういった課題があるのでしょうか？

緑川　一般級こそこういう授業をやると面白いことが生まれると思うのですが、「授業なんだから（もっときちんと組み立てないと）」という声がきっと教員からもあがると思います。そういう点では、個別支援学級は一般級と比べて理由を付けやすいですね。人前で話すのが苦手な子であれば、みんなの前に立って身体を動かしただけでもすごいことだし、評価ができる。僕は、このプログラムでは自立活動として一人ひとりに合わせた目標を持って授業をしていると、自信を持って説明できます。ただ、一般級の場合は音楽や図工など教科の枠組みのなかで時数を確保しながら実施しなければならないので、一筋縄ではいかない部分があるのではないでしょうか。アーティストにもある程度、教育課程に沿ってできることを考えてオーダーしなければならないので、本来の面白さが伝わりづらくなってしまう難しさもあると思います。

雨宮　通常の授業には明確なねらいがあり、どうしても完成形を求める部分がありますよね。「この能力を身に付けさせよう」という目的のもとで授業を組み立てるので、子どもたちの感じるままに持っているものを引き出していくこのプログラムとは大きく性質が異なります。この授業は、子どもたちの中からどんな力が出てくるのかを待つというスタンスなので、自由にのびのびと活動できる時間だなと思います。

長井　いろいろな学校で授業をしていると、個人としてはもっと子どもに自由にやらせてあげたいけれど、教員としてはここから先に

はいけないという先生方のジレンマを感じることがあります。特に一般級ではその傾向が強いように感じていて、先生から「もっと自由にやっちゃってください！僕からは言えないので！」と言われたこともあります。先生方は、叱るべき時はきちんと叱らなければいけない子どもたちとの日常の関係性があり、いろいろなルールのなかで授業をしなければならない立場でもあると思うので、私たちアーティストを上手く使ってもらえたらなと感じています。

―昨今の学校教育では、新しい学習指導要領の理念として「社会に開かれた教育課程」が掲げられています。教員以外の大人も学校教育に携わる機会が増えると、教育のあり方もより良い方向へ変化していくのではないかと感じます。

緑川　僕は、教員の授業だけで学校教育を完結させてしまうのは望ましくないと考えています。こういう授業は僕が計画しようと思ってもできないし、教員ではない大人たちと活動するのは、どの子どもにとっても、貴重で大切な経験になると思います。

雨宮　私はやってみてから、この授業の良さに気が付きました。初年度は「授業としてはどうなんだろうか」と少し疑問を抱いている部分もありましたが、子どもたちは図工や音楽といった教科の枠組みを超えて、作る楽しさ、音の面白さを感じられるようになっていきました。体験したら絶対に良さが分かると思うので、ぜひこういった取り組みが広がっていってほしいと思います。

長井　ダンス、音楽、ものづくり、どれにハマるのかは子どもによって本当に違うので、何か１つでも得意なこと、好きなことを見つけられるよう、きっかけをできるだけたくさん渡してあげたいと思っています。まずはいろいろなものに触れてみないと、子ども自身も自分の好きなものが分からないですよね。

北山田小学校の授業の様子。ぴんたろーさんが小さな楽器を叩きながら教室の中をまわり、子どもたちは頭上近くからその音の迫力に包まれる感覚を味わった。

ぴんたろー　音楽にかこつけたいろいろなことなんですよね。音楽でもものづくりでも、何かのめり込めるものを見つけてほしい。自分が小学生の頃は外部講師が来て授業をしてもらった記憶はなく、音楽の先生もあまり熱心ではない人でした。だから音楽の授業は嫌いで、成績もずっと１だったんです。年に１度、自衛隊の吹奏楽部が演奏に来てくれる鑑賞教室はとても嬉しかった記憶がありますが、他のジャンルの音楽に触れる機会はありませんでした。だから大人になってから、子どもの頃にヴァイオリンを聴いていたら、チェロに出会っていたら、どんな未来があったんだろうと思うことがあります。パーカッショニストじゃなくて、チェロ奏者になっていたかもしれない。それくらい、子どもの頃に何に出会うのか、というのは大きなことだと思います。

授業で使った体験用の楽器は、本来はその日のうちに持ち帰るのですが、以前授業に行った学校で大太鼓にものすごくのめり込んでいる子がいたので、その楽器を置いて帰ったことがありました。その子はそれから毎日、その大太鼓を叩いていたそうです。音楽に限らず、自分が楽しいと思えるものに出会うと、子どもは勝手にそれを追求していきますよね。一流と言われる音楽家、演出家、作家、スポーツ選手なども、「子どもの頃に見たこれに影響を受けた」とハッキリ言う人がたくさんいます。関係性の問題とはまた別に、例えば１ヶ月に１度でも、外部のいろいろなジャンルの方々を招く授業があったら良いのになと思います。

長井　そうですね。私の小学校には学芸会もなかったので、こういう授業を受けられる子どもたちがすごく羨ましいです。私が授業をさせてもらう根底には、自分が子どもの頃、大人に言ってもらいたかった言葉を伝えたいという思いがあります。「あなたは人と違うかもしれない、でもそれでいいんだよ」。私が子どもの頃、そう声をかけてくれる大人はいませんでした。誰か１人でも分かってくれる人がいたら、もうちょっと生きやすかったんじゃないか。それなら私は子どもにとって、その１人になりたい。そう思って授業をしています。この授業の意義を考え出すと、自分は子どもたちに何を残せたのだろうかと悩んでしまうこともありますが、最終的に何かを見つけるのは子どもたち自身なので、私が知る必要はないのかもしれません。

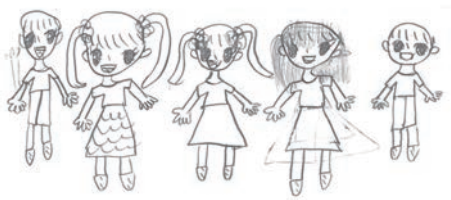
雨宮　それは永遠の課題ですよね、分からないです。ただ、授業の直後に目に見えた変化がなくても、授業でやったことが心の何処かに残っていて、数年後の行動が変わるかもしれない。いつどこで花開くかは分からないので、子どもたちのなかに何かが残ると信じて、できる限りのことを提供していくしかないのかなと思います。

アーティスト、教員、コーディネーターがそれぞれの立場から子どもたちにできることを考え抜き、絶妙なバランスで実践されている学校プログラム。同じアーティストが複数年にわたって同じ学級に関わることで、子どもや教員との信頼関係が生まれ、のびのびと活動できる環境が作られていくことが分かりました。そうした安心感のなかで行われる「いつもと違う授業」によって、子どもたちは人生を変える“何か”に出会う。その出会いがいつ花を咲かせるかは分からなくとも、１人でも多くの子どもたちの心に種をまき続けられるよう、プログラムがさらに発展していってほしいと感じる座談会でした。

（文／橋本彩香）

編集を終えて

＼ 児童が描いたアーティストの絵 ／



表現することを恥ずかしいと思うようになったのはいつからだろう。
記録集を作るにあたって６つの学校に足を運ぶなかで、そんなことを考えていた。

授業後にあるダンサーが、「私は全身を使って表現することが当たり前になっているけれど、馴染みのない人にとって、この表現手法はこんなにもハードルが高いことなんだと突きつけられました」と話してくれたことがあった。さまざまな学年の子どもたちが授業を受ける姿を見たが、「表現する」という課題が出た時に、嬉々として取り組む低学年・中学年の子どもたちに対し、高学年・中学生になると、躊躇いを見せる子どもたちが増えていったように思う。

また別のダンサーは、「表現というのは表に出てしまうもので、上も下も、良いも悪いもない。だけど嘘か本当かはあるんだよ。自分の中にあるものと、表に出ているものが違うというのはすごく苦しいこと。だからこの授業では、自分が本当に思っていることや感じたことを嘘なく表に出す練習をしていこう」。そう子どもたちに語りかけていた。

恥ずかしいという感情も、決して否定されるべきものではない大切な気持ちだ。けれど多くの大人たちは、その「恥ずかしい」という感情が、時に前へ進もうとする自分の足を重くすることを知っている。特に「表現」という舞台で、自分の感性を武器に闘ってきたアーティストたちは、何度となく「恥ずかしい」を乗り越えてきたはずだ。そんなアーティストの言葉だからこそ、子どもに届いたのだろうと感じた場面があった。

ある学校の授業最終日。テーマに沿って一人ひとりが制作した作品を発表する時間があった。アーティストとの授業を重ねた子どもたちは、視点も手法も全く異なる個性豊かな作品を、緊張しながらも堂々と発表できるようになっていた。次々と発表が進み、ある生徒の順番がやってきた。彼女はテーマに沿った曲を考え、楽譜を皆の前で発表した。全ての生徒が楽譜を読めるわけではないので、アーティストが「ピアノ弾ける？せっかくだから弾いてみてよ！」と声をかけると、彼女は頑なにそれを拒否した。お姉ちゃんにダサいって言われたから嫌だ、と。アーティストが「ダサくて何が悪いの？」と声をかけても、クラスメイトが「大丈夫だよ！」、「頑張れ！」と声をかけても、彼女はピアノに近づこうとしない。そこでアーティストは、クラス全体にこんな話をした。

「どうして創ったものを人に見せたくないかっていうと、ジャッジされたくない気持ちがあるから。私は表現したら馬鹿にされて、というのをもう 100 万回やってきたから大丈夫になったけど、創ったものを馬鹿にされたらと思うと、それはすごく怖いことだよね。でもそれを乗り越えられなかったら、せっかく創ったその作品は一生表に出すことができない。思い切って出してくれなきゃ、いいねって言ってあげることもできない」。

アーティストが想いを伝え、クラスメイト、先生、コーディネーター、誰一人急かすことなく、彼女の重荷に寄り添っていた。彼女に許可を取り、音楽家である別のアーティストが楽譜を見ながら演奏する形で、曲を披露することになった。演奏が終わり皆が拍手を送る。すると彼女が、ピアノに向かって歩き出した。自分の曲が受け入れられた安心感と、自分の中にあったものと表に出たものが違う歯がゆさと、アーティストの想いと。いろいろなものが彼女の背中を押したのだろう。一歩ずつピアノに近づき、アーティストと並んでピアノの前に座る。そうして彼女は、アーティストと共に、とても素敵な曲を聴かせてくれた。

お姉ちゃんの言葉は、他愛のない姉妹の会話のなかの、ほんの冗談だったのかもしれない。誰かが何気なく口にした言葉、視線や空気で、私たちは少しずつ「恥ずかしい」という重荷を背負ってしまう。だけどそれでも、「表現することは恥ずかしいことじゃない」。何度も何度も傷ついてきたアーティストたちが、この言葉を直接子どもたちに届けられることが、このプログラムの持つ大きな意義なのではないかと感じた。

「子どもの頃に、こんな授業を受けたかった」。このプログラムに携わる大人は、口を揃えてこう話してくれた。けれどこのプログラムを体験した子どもたちが大人になった時には、「子どもの頃にこんな授業があったから、今の自分があるんだ」と、胸を張って話してほしい。そんな未来が来ることを、心から楽しみにしている。

最後になりますが、この記録集を作成するにあたってお力添えをいただいた、アーティスト、先生、コーディネーター、そして子どもたちに、心より感謝申し上げます。できる限り皆様の想いを形に残せるようにと書き記しましたが、記録集の中で直接言葉をご紹介できたのはほんの一部です。実際にはもっともっとたくさんの想いから、このプログラムは成り立っています。直接言葉はご紹介できなくとも、皆様にお聞かせいただいたこのプログラムに対する想い、子どもたちへの想いが、この記録集の礎となりました。

「恥ずかしい」という重荷を背負う前の、心の底から表現を楽しむ子どもたちも、その重荷を背負いながら、勇気を振り絞って表現に挑戦する子どもたちも、一人ひとりが本当に格好良く、輝いていました。この授業を受けた子どもたちの人生が、より豊かで彩りあるものとなりますように。そして人生を豊かにする“出会い”が、来年も再来年も、1 人でも多くの子どもたちにもたらされますように。

（橋本彩香）

発行日：2023年3月17日
編集：橋本彩香（ライター）、髙荷春菜（認定NPO法人ＳＴスポット横浜）
写真：橋本彩香（一部を除く）
デザイン：下町編集室OKASHI（小林璃代子、鈴木茉凜）
印刷：共進印刷株式会社

主催：横浜アーツフェスティバル実行委員会
運営：横浜市芸術文化教育プラットフォーム事務局

横浜市芸術文化教育プラットフォーム事務局
（認定NPO法人ＳＴスポット横浜／公益財団法人横浜市芸術文化振興財団／横浜市教育委員会／横浜市文化観光局）
〒220-0004　横浜市西区北幸1-11-15横浜ＳＴビル地下1階　認定NPO法人ＳＴスポット横浜 内
TEL：045-325-0410　FAX：045-325-0414　URL：https://y-platform.org/